



Data

監督: ポン・ジュノ
 脚本: ポン・ジュノ、ハン・ジヌオン

出演: ソン・ガンホ / イ・ソンギョン / チョ・ヨジョン / チェ・ウシク / パク・ソダム / イ・ジョンウン / チャン・ヘジン / チョン・ジソ / チョ・ヒョングジュン

👁️👁️ みどころ

これは面白い！ポン・ジュノ監督はすごい！目下、日韓関係は最悪で、文在寅大統領も最悪（？）だが、韓国映画は圧倒的に邦画よりすごい。韓国初のパルムドール賞おめでとう！また、韓国初のアカデミー賞作品賞、監督賞等のノミネートおめでとう！

「格差」と聞けば、英国のケン・ローチ監督の得意テーマだが、たまたまは枝裕和監督の『万引き家族』（18年）も本作も、それがテーマ。しかし、「社会派」と自他共に認めるケン・ローチと、あえて「映画派」と称するこの2人のスタンスは大違い。そのため、本作にはタランティーノ監督と同じような、B級映画的面白さもタップリと！

半地下住宅に住む4人家族が高台の豪邸に住む4人家族にパラサイトしていく前半も面白いが、監督自ら「ネタバレ厳禁！」を強調する本作では、その後のあっと驚く展開に注目！それを予測できる人は誰一人いないだろう。



■韓国初のパルムドール賞！ポン・ジュノ監督おめでとう■

第71回カンヌ国際映画祭の最高賞＝パルムドール賞は枝裕和監督の『万引き家族』（18年）（『シネマ 42』10頁）が受賞したが、続く第72回のパルムドール賞は韓国のポン・ジュノ監督の本作に輝いた。韓国初の受賞と聞くと、韓国映画のレベルの高さをよく知っている私には少し意外だが、何はともあれポン・ジュノ監督おめでとう！

私は彼の処女作たる『ほえる犬は噛まない』（00年）は観ていないが、2作目の『殺人の追憶』（03年）（『シネマ 4』240頁）と3作目の『グエムルー-漢江の怪物-』（06年）（『シ

ネマ 11』220 頁) を観て、すっかり彼のファンになった。その後の『母なる証明』(09 年) (『シネマ 23』131 頁) も、『スノーピアサー』(13 年) (『シネマ 32』234 頁) もすばらしかった。なお、『殺人の追憶』も『母なる証明』もタイトルを見ればどんな映画か想像がつくが、『グエムルー漢江の怪物-』も『スノーピアサー』もタイトルだけでは何の映画かサッパリわからない。そのため、『グエムルー漢江の怪物-』については事前に「これは、怪獣映画」と考えて観るのをやめようかと思ったほどだが、もしそんなことで見逃していたら大変だった。しかして、本作のタイトルになっている「パラサイト」とは？

それは私の英語力でもある程度イメージできるが、辞書を調べると「パラサイト」とは寄生虫のこと。また、原題は『GISAENGCHUNG』で、英題は『PARASITE』だが、邦題には『パラサイト』の他に『半地下の家族』という副題がついている。そのため、本作はタイトルだけでそのイメージを描くことができる。ちなみに、ドストエフスキーの小説に『地下室の手記』なるものがあり、私はこれを大学 2 年生の時に読んだが、これは何とも陰鬱なものだった。すると、『パラサイト 半地下の家族』と題された本作もそれと同じように陰鬱なもの？いやいや、ポン・ジュノ監督でパルムドール賞を受賞した映画なら、決してそれだけのものではないはずだ。

■□■カンヌの「対抗馬」は？第 92 回アカデミー賞候補は？■□■

本作を観た翌日 1 月 12 日に大相撲初場所が始まったが、そこには 2019 年ラストの九州場所で 4 3 回目の優勝を飾った白鵬と、秋場所と九州場所を 2 場所続けて休場した鶴竜の両ベテラン横綱に対して、世代交代を目指す貴景勝、朝乃山、北勝富士、御嶽海らイキのいい若手がいかに対抗する(できる)かが最大の注目点になっている。それと同じように、2019 年 5 月の第 72 回カンヌ国際映画祭のコンペティション部門では、結果的に本作がパルムドール賞を受賞したが、多彩な 21 作品は名作揃いで、新旧の対抗馬は多かったらしい。

私が切り抜いていた発表前の新聞紙では、ケン・ローチ監督の『家族を想うとき』(19 年)、テレンス・マリック監督の『ヒドゥン・ライフ』(19 年)、ペドロ・アルモドバル監督の『ペイン・アンド・グロリー』(19 年)、クエンティン・タランティーノ監督の『ワンス・アポン・ア・タイム・イン・ハリウッド』(19 年) 等のカンヌ常連組の作品がまず注目を集めたらしい。そして、それに対抗する若手作品としては、黒人女性監督マティ・ディオップの『アトランティックス』(19 年)、黒人監督ラジ・リリの『レ・ミゼラブル』(19 年) 等が注目されたそう。しかして、パルムドール賞を受賞した本作について、新聞各紙は「韓国待望の最高賞」「社会の不平等 捉え直す」「意表を突く転換の連続」「格差、寄生・・・予測不能の展開」「格差社会の濃密な悲喜劇」「格差広がる韓国生々しく」「ポン・ジュノ監督『現在進行形で続くテーマ』」等の見出しを掲げて絶賛していた。

さらに、本作鑑賞直後の 2020 年 1 月 13 日に発表された第 92 回アカデミー賞ノミ

ネット作品では、作品賞に本作が、監督賞にポン・ジュノが、脚本賞にポン・ジュノとハン・ジヌオンがノミネートされる等と計6部門でノミネートされたからすごい。韓国映画がアカデミー賞にノミネートされたのは史上初だ。アカデミー賞主演男優賞はきっと『ジョーカー』のホアキン・フェニックスで決まりだろうが、作品賞、監督賞、脚本賞の行方は如何に？

■□■彼は社会派？いやいや映画派！是枝監督との対談は？■□■

1月11日(日)のNHK朝7時のニュースは、「ビッグ対談」としてポン・ジュノ監督 vs 是枝裕和監督の対談を登場させた。イギリスの巨匠ケン・ローチ監督は「社会派」と呼ばれており、労働者階級の視点から格差の広がり鋭く切り込むのが得意。そのため、1度ならず2度も引退を撤回してまで、最新作『家族を想うとき』を監督し、同作はカンヌでも高い評価を受けた。そう考えると、第71回でパルムドール賞を受賞した『万引き家族』も今回パルムドール賞を受賞した本作も、社会の底辺に生きる人たちに焦点をあて、格差の広がりを鋭くついた問題提起作だから、是枝監督もポン・ジュノ監督もケン・ローチ監督と同じような社会派？

私が本作を観たのは1月10日(土)だが、翌1月11日の2人の「ビッグ対談」では、「あなたは自分を社会派監督だと思っていますか？」との質問が出されていた。それに対するポン・ジュノ監督の答えは、「いや、そうとは思っていない。あえて言えば自分は映画派だ。」というものだった。そして、是枝監督も「僕もそれと同じです。」と答えていた。ケン・ローチ監督は格差の広がりとそれによる労働者階級の窮状を見て、マルクスやエンゲルスがその問題点を経済的に分析したのと同じように、「自分は映画監督という立場からその問題点を分析しなければ、そんな思いに駆られるらしい。しかし、是枝監督もポン・ジュノ監督も決してそうではなく、あくまで映画では「人間を描きたい」と願うだけで、格差問題はたまたま1つのテーマとして取り上げているに過ぎないわけだ。

ちなみに、2019年10月27日に初放映されたNHKドキュメンタリーBS1スペシャル「是枝裕和×運命の女優たち～フランスで挑んだ1年の記録～」は、『真実』(19年)の撮影を続ける是枝監督に1年間密着取材した成果をまとめた番組だった。そして、ここでは、「格差」とはまったく関係のない大女優カトリーヌ・ドヌーヴの生きざまに是枝監督が焦点をあてていた。「格差」だけにこだわらないのはポン・ジュノ監督も同じで、『殺人の追憶』『グエムルー漢江の怪物』『母なる証明』『スノーピアサー』等の登場人物は底辺の人間が多いものの、『グエムルー漢江の怪物』では奇想天外な漢江の怪物というB級映画的な面白さがあったし、『スノーピアサー』ではSF世界の子供の発想の延長のようなものがあった。そう考えると、是枝監督やポン・ジュノ監督のことを「社会派監督」、また、彼らの作品を「社会派作品」と呼ぶのは適切ではないようだ。

■□■名優ソン・ガンホは、本作でどんな父親像を？■□■

本作に主演し、加齢臭ならぬ「半地下臭」をまき散らしていることが嫌がられる一家の主キム・ギテクを演じるのは、あの丸っこい顔が一目見たら忘れられない俳優ソン・ガンホだ。彼は、カン・ジェギユ監督の『シュリ』(99年)やパク・チャヌク監督の『JSA』(00年)、『シネマ1』62頁)等、韓国特有の南北問題をテーマにした映画では、シリアスな役をシリアスに演じていた。また、私の大好きな『親切なクムジャさん』(05年)、『シネマ9』222頁)や『濁き』(09年)、『シネマ24』未掲載)、『密偵』(16年)、『シネマ41』236頁)、『タクシー運転手〜約束は海を越えて〜』(17年)、『シネマ42』248頁)でもシリアスな役をシリアスに演じていたが、あの丸い顔を見ていると、どこか愛嬌を感じるから面白い。『男はつらいよ』シリーズでフーテンの寅さんを演じた渥美清は「四角い顔」がすぐに覚えられるが、ソン・ガンホも丸い顔ですぐ観客に覚えてもらえるから俳優としては得だ。彼は、ポン・ジュノ監督作品では、既に『殺人の追憶』『グエムルー漢江の怪物』『スノーピアサー』で出演しており、本作は4度目の登場になる。

そんな彼は、1月10日付朝日新聞では、石飛徳樹氏の取材に対して、「これまでも傑作がたくさんあったのに、パルムドールには届かなかった。やっと無念が晴らせた気分です」と語っているが、きっとそれが正直な気持ちだろう。また、カンヌでは評判になっていたが、「面白すぎて賞は取らないのでは」という予測が飛び交っていたらしいが、彼は、「私も意外でした。ポン監督は芸術性や社会性に加え、大衆的面白さを必ず盛り込みますからね」と語り、さらに、「もし、そんな印象を持ってもらえたのなら、映画を見る観客の目が肥えているからだと思う。国の規模からすると、映画人口が大変多い。うかつなものを作ると、すぐ観客にそっぽを向かれてしまうんです」と語っている。

そんな名優・ソン・ガンホは、本作でどんな父親役を？

■□■半地下住宅とは？そこでの4人家族の生活は？■□■

ソン・ガンホ演じるギテクは、過去に何度も事業に失敗し計画性も仕事もないが、楽天的な父親。そんな甲斐性なしの夫に強くあたる妻が元ハンマー投げ選手のチュンスク(チャン・ヘジン)。そして、長男は大学受験に落ち続け、若さも能力も持て余しているギウ(チェ・ウシク)、長女は美大を目指すがうまくいかず、予備校に通うお金もないギジョン(パク・ソダム)だ。本作冒頭は、そんな4人家族が住む半地下住宅がつぶさに映し出されるのでそれに注目！

都市問題をライフワークにしている私は、それに加えて住宅問題も研究しているが、寡聞にして「半地下住宅」なる「住宅」は本作を観るまでまったく知らなかった。これは、韓国特有の住宅で、もともと北朝鮮からの攻撃に備えた防空壕だったらしい。冒頭のシークエンスでは、そんな「半地下住宅」の実態(狭さ、暗さ、臭さ、水回り、電波状態等)

が、ポン・ジュノ監督特有の視点で描写される。しかし、そのうちの狭さ、暗さ、臭さ（ちょうど居住者の目線に入る道端では酔っぱらいが、よく立ち小便している）、電波の悪さ、はすぐに理解できるが、水洗便所の排水問題までわかる日本人は少ないだろう。したがって、冒頭ギウとギジョンが家の一番高いところに鎮座しているトイレの横に行き、そこで「やっと電波が通じた！」と喜んでいるシーンの意味もわからないはずだ。少なくとも私にはその意味がサッパリわからなかったし、そもそも、この4人家族はこんな1番高いところにある公共空間（？）で大小便ができるの？そんな疑問が湧いてくる。

なお、そんな冒頭の疑問は、後半の大雨のシークエンスになると、あっと驚く事態を引き起こすので、それに注目！

■□■監督直々の「ネタバレ厳禁！」のお願いが！■□■

本作はギテクを家長として「半地下住宅」で暮す4人家族が、高台にある大豪邸に住むIT企業の社長パク・ドンイク（イ・ソンギョン）の家族に寄生（パラサイト）する物語。ドンイクの美しく純真な妻がヨンギョ（チョ・ヨジョン）。そして、最初にギウから英語の家庭教師を受けることになる高校生の娘がダヘ（チョン・ジソ）。そして、ダヘに続いてギジョンを美術の家庭教師につけてもらうのが、わんぱくざかりの男の子ダソン（チョン・ヒョンジュン）だ。ギテクの一家が4人家族なら、ドンイクの一家も4人家族だが、その生活レベルの違いはすごい。まさに格差社会とはこのことだ。しかし、受験経験は豊富だが学歴のないギウが、そんな裕福な一家の娘ダヘの英語の家庭教師に就くことができたのは何ともラッキー。さらに、さまざまなウソと策略を巡らせたとはいえ、ギウとギジョンのみならず父親のギテクもドンイクの運転手として、母親のチュンスクもヨンギョの家政婦としてパク一家の下に就職（パラサイト）できたのは大ラッキー。

もともと、本作導入部のこのストーリー展開は、ポン・ジュノ監督特有のB級映画的、マンガ的な設定だが、このパラサイトが順調に進めばノープロブレム。しかし、それでは面白い映画にならないから、さあそこからポン・ジュノ監督は本作をどんな意外な、そして波瀾万丈の展開にもっていくの？それをしっかり鑑賞した私は、本作の評論をいっぱい書きたいと思って筆を取ったのだが、何と本作のパンフレットの冒頭には「ポン・ジュノ監督からのお願い」があった。そして、そこでは、「頭を下げて、改めてもう一度みなさんに懇願をします。どうか、ネタバレをしないでください。みなさんのご協力に感謝します。」と書かれていたからアレレ……。さあ、どうしよう。

■□■この豪邸のリビングでくつろげば最高！しかし・・・■□■

私は美しい女優が大好き。それは私が男だから当然だが、『後宮の秘密』（12年）で見せてくれた美人女優チョ・ヨジョンの脱ぎっぷりにはビックリ！同作は、先王の愛妾をめぐる確執をテーマにしたものだが、「あまりにも脱ぎすぎ」「また脱いだ」との批判も何のそ

の、美人女優チョ・ヨジョンの美しい肢体が全編のストーリーをリードしていた。そのため、「女は弱し、されど母は強し」のことわざがしっかり確認できること請け合いだが、それ以上に「女は恐ろしい」という実感が・・・(『シネマ 30』116頁)。そんなチョ・ヨジョンが本作では、それと正反対の、清楚で、ある意味お人好しの億万長者の妻ヨンギョ役を演じているので、それに注目！『後宮の秘密』からの変身ぶりを見ると、本作でも私には「女は恐ろしい」という実感が・・・。

当初、パク家にパラサイトできたのは長男ギウのおかげだが、本作導入部では、そこでのヨンギョの騙され方が面白い。そこから芋ずる式にキム一家の4人すべてがドンイクたち4人家族が住む高台の豪邸にパラサイトしていくストーリーはある意味恐ろしいが、同時に喜劇的。しかして、ある日パク一家がダソンの誕生日のお祝いのキャンプのため遠出していくと、キム一家の4人はあの豪邸の広いリビングに勢揃い。ここなら、あの「半地下住宅」と違って、何ゴトも快適だから、こんな幸せなことはない。ギテクたちは4人ともそう考えながら、つかの間の幸せを噛みしめていたが、さあ、後半はいかなる怒濤の展開に？

それは、パンフレットにも書かれていないし、ポン・ジュノ監督自らの「ネタバレ厳禁のお願い」に従って、どのブログにも書かれていないはずだから、それはあなた自身の目でしっかりと。

2020（令和2）年1月20日記